

ナロジチの放射能汚染を減らす新しいプロジェクトがいよいよ始まった。5年計画のこの事業は汚染地域の人々に希望を与え、未来を開く可能性を秘めている。ますます深刻化する世界のエネルギー需要に、資源小国ウクライナのバイオエネルギーへの期待も大きい。地球温暖化対策をうたった新たな原発開発も聞こえてくる現在、チェルノブイリのもたらしたものを忘れず、しかし被災者救援のために可能な努力を我々は続ける。

● 種まきは4月13日

ナロジチ地区スターレ・シャルノー村はナロジチ本町から少し東、チェルノブイリ原発寄りにある。汚染レベルはCs137で10~15キュリー/Km²。20年間放置されてきたこの原野に、4月13日に春蒔きナタネの播種が行われた。ジトーミル農業生態学大学のシェードフ教授の指導のもと、同大学の研究員と現地住民が作業した。種まきには日本人2名も参加しビデオ撮影を行った。蒔いたナタネの種類はBrassica napus(学名)、日本では西洋ナタネとして知られる。播種前には、分析用土壌サンプルを採取。Cs137を最も効率よくナタネが吸収出来る栽培条件を調べるために、窒素肥料とリン酸肥料の様々な組み合わせで肥料が施された。収穫後にナタネを分析すれば、セシウム吸収の最適条件が分かるはずである。ナタネ栽培前後の土壌、収穫したナタネの油、油粕、葉、莖、根のバイオマスなど、1年間に分析するサンプルは、800検体に上る。これだけ体系的なセシウム吸収試験は世界でも類が無い。結果は学術的にも貴重な情報を提供するだろう。気候にもよるが、開花は早ければ6月下旬、収穫は7~8月の予定である。

● 秋蒔きナタネも実施

春蒔きナタネに加えて秋蒔きナタネも栽培する。春秋合わせて4ヘクタールである。秋蒔きの播種は9月ごろの予定である。厳寒のナロジチでの冬季の凍結が心配だが、シェードフ教授によれば可能とのこと。生育期が長い秋蒔きの方が種子の収穫量は多い。1ヘクタール当たり1~2トンの収穫を見込むが、目的は収量よ

りも放射能吸収であり、次年度の栽培条件は今年の結果によって決める。

● 飛来したコウノトリ

種まき時の様子を撮影した写真を見ると、コウノトリが沢山畑に舞いおけている。耕した地面で虫やミミズを食べるためである。現地訪問時にコウノトリを見かけるが、これだけ群れているのは初めてである。幸せを運ぶコウノトリの訪問はいささかうれしくなるが、コウノトリが食べている虫やミミズもまた放射能で汚染している。人間同様、食物連鎖の頂点に立つ鳥類は汚染と被曝もまた大きい。我々の畑で食べる虫やミミズがいつの日か安全になり、コウノトリにとってもこのプロジェクトが幸せを運ぶ結果になるよう期待したい。

● バイオディーゼル・プラントも始まる

次はバイオディーゼル・プラントである。今年1月にナロジチを訪問した伊那市の前澤功氏がすでにプラント設計を開始し、年内には国内での仮組み立てを目指す。現地の設置場所は、ナロジチ本町の西端にある旧配合飼料工場と決まった。工場とナタネ畑の距離は約7Kmあるが、輸送などには都合がよい場所である。ここに、バイオガス・プラントも設置する。工場用地とナタネ栽培畑は公有地であり、無償で提供される。プロジェクト全体の現地責任者はナロジチ区行政長のサブリュク氏。本人もナロジチ出身で移住者の経験をもつ。ナロジチ再生に情熱を持って取り組んでくれそうである。5年間で約4千万円かかる資金面での皆様の支援をお願いしたい。(河田)